色紙集　二

異名　名所　物語名

万葉集并古哥　伊勢物語後撰六帖

並古哥會釈　中之一より三之下迄

辰

二

土岐文庫
文庫17
W43
2

和歌色葉集上之三

七通用名字者　付 仮名

かうきこゑの中に物のことなる名あり

又まなむさしをいふに割綱つくひあり雑

商に生かなる名とい命又の次第にやへ

しかなかの用をとうるに略して十

歌あり

一天象部

天 あまのはら　月 夕附月 あけのきさて　ゆふつくの月 片破月 中張月 まちまち月

まちあまてる月　星 ひこほし 七夕 よあひ星 雲 志し うきく

ありあけ もろかし

ふじゐ

早稲田大学図書
松宇文庫
羽澤文庫
文庫 17 W43 2
昭和六十年二月一日 ……氏寄贈
010185195134

いさよふ よこ むさめ 村雨 時雨 ひちり
夕のり わさ川 雨 春 春さめ 夕立 さ雨 卯花くたし 五月雨
風 しのゝをすゝき 春風 東風 北風 坤風 山下風 北風 塩風
沖津風 秋風 わかし ちかう 野分 木の下風 ひろき風
海風 山あらしの風 家の風 木枯 いなさき 霧 いさよひ 秋霧
わたし 花なしの風 翠風や 夕河
霞 朝夕 露 白露 夕下 霜 朝夕 春霜 雪 ちる木 わかる 雪かう

二 地儀部

山 あしひき 奥山 山のはの ゆきあひの森 あけ出なり
りけそめ 立まゝ 末の しまちかく
峯 中川 万葉ふ 中川 かの 棧 又中川 ○の 椿とも 上がり
岩尾 狭
谷 鄕 青 山ひこ わま 巖 ○ しま 岩根 わかれき 中
ひこそも へ○
地 あ○○ 砂 さされ石 野 春の野 春の野 秋の野 冬の野
しま○○ 小石 くれの いもの すその くまさ
石 山から 田 山田 門田 早田 小田 かの田 野田 深田 新
田 沢田 沢田 あら田

三 海水部

塩 もしほ ほさきつ 水海 よかてる 浪 白妻なみ 末の 礒 高き 浅き
貝 ちらさせ しを ひ 泡 うくく 沖津 ならろ さゝら
しほ 瀬 しけ 河 さやき山 細谷
海 あら まかくつ 水 石清 いえらさ 岳 宮 北の 北東風
ちら 坂田の清 され 谷の下 沢 くけ 内の 山下
舟 みなくしを おかつら あまと あまの 高く
沖津 あ さわ あけの そか つし
おしなや うら 浦 わくさを 行く 通舟 しか ろま いし
こゆか なし とも

四 木草部

木 こなれ そなれ 浮 松 そなれ 二葉の 松 濱 玉 すまうの
朽 えたまた 老 朽 葉 岩根 その の わき への の さき ちる その
千年の 梢 あと あさも むかし なかの え 桜 まなかの 桜 山 花
大 そそ りとおの 柳 河 門そひ あら 玉 さほ 柳 の 末 柳
ぬ の眉 朽木乃

花しめゆる　菓しまひこ　躑躅岩白もち　紅紫の極
岩根　草さいろまの浅香　杜若号伐伊多津万　くゝ月
すい穏夜すすひ　秋萩山下　ゆめの下ゆけ　よりひ　あさの下
しく落み　壁草いわまて　蕨さうき　めろ
めろろろ　瞿麦なり　萩まかいと　葵あま
瞿麦床夏ら　やまけ　りわつの　蘭かちろうま
しの志のを　白八重山路の　白まろ
落すまろの一村　菊一本きれろ　苔いえりく　忘草
こまの　芦乱しかれあの根　葛さのをもの　くもく
葭流村枝あつ　葛すのわきち　葛くも
萩かちかを　竹呉かまとなより
りきくしのす

五時之部

春あさ緑　夜あけ月　秋初秋夜　冬み　霄さよ
曙きしられ　朝あさまかて　晩あそくれ時　小夜之
かゝられ時　朝あさまき　夕され　正月もゆさらう

ゆくは睦月と　二月字きらて衣をきさらまきれい　三月弥生
ゆふなり　きぬきさらぎといふなり　あや
うえて草木のいよいよ生れい　四月卯花月と　いふなり
やよひ月といふなり　陰流衣さらは開それい
五月ぬなうえ早苗月ともいふ　六月農のいとまれをかさ
又五月はあつくてみなも家も　みなつき月と云へ
れつきたえれ月といふ　七月七夕よりつきて文ひきる
ゆくなり　八月木の実のみのりて出るれい　九月菊の花さく
まつさといふなり　なりろ名れい
よなろ月と　十月天下の諸の神たちの出雲に行て依国
いふなり　は神のたりせぬゆくよ神無月と云之
霜のしるわきふれい　十二月僧をむかへて仏名を
霜月といふ　行ひ師をよませ年
西よ年をおくる　極月とも
志を世月といふ

六神祇

神あまつかみ天神　国つかみ地神　人すへらきの神の御名
いみ　山姫さまへ　竜田姫　春をかする神　立田姫　秋

をうりの神之宝殿 ほくら 垣 かき あけの しまいめ
幣 みてくら ぬき 貫木 ぬきのき 榜 ふれさき 家のうへなか
まつりことの人形 ひとかた 巫女 かんなき
卜占 うらなひ 祈精 いのり 呪詛 のろひ
奉納物 たむけ

七人倫部

國王 やすみしし八方自在故之 太上天皇 おりゐのみかど
こくわう みかどのまつりことをおさめたまふ 中宮 ちうぐう 后
親王 とうぐうの 内裏 大臣 中納言
左大臣 侍従 文

母 ちはゝ 賤女 しつのめ 若女 わかめ 盗人 ぬすびと
顔面 かほおもて 腕 うで 思 おもひ 剃 そる
髪 かみ かんざし

八資具部

鬘 かつら 櫛 くし 枕 まくら
鏡 かゞみ 簪 かんざし
遠 鬠 衣 ころも
まそすわうの衣 ころもの色
あけの衣 紫の衣 六位の衣
くれのあゐの衣 わかさ 白
すりの衣 伶の衣 仙人の衣
衣 志川の衣 白衣
海士人の衣なり 糸 ひきいと

和琴 あづまごと 弓 梓 あづさのま あづちのま 笠 すげのと

あづちの生中 火 おのゝき 狸 数世 とりしらひの

九 居所部

京 みやこ 平城 ならの都 月裏 殿上 雲の上

屋 玉まくら 家 ならの都 戸 まきのと

やどり 宿の ならの 垣 柴垣 竹のあみど 竹のまがき

山家 やまざと

十 畜類 付禽獣虫

鶯 谷の 郭公 山 水鶏 雁 かりがね 初 帰

千鳥 友まよふ 夕 鴨 すまし 鴫 かはちどり

鶴 あしたづ 鶏 八こゑの鳥 ゆふつけ鳥

雛 初音 鶉 鴫 夕まぐれ

鴈 やどる 鹿 すがる 男 猿 ましら 蝉 空蝉 螢 夜の

虫 松虫 すゞむし

次は剣の詞つゞき八の具にて入し

一 天具

わたつみ 空の わたつみ 雨の晴 何ま雲

天の雲 雷 空のやま雲 雨の

月 月影清し 月影しみ 月影

二時具

小夜中 小夜中之 明果 夜開なり 竟のかれ月 又月又日夜を

る鳩のまゆるの手結の月なりけ山日からの夜こ 早国之風夜

ちかをひきたりひなり とものも

すゝそいふる朝字 日開之又和食ゆふくまく 夕方

是ハ風そうきわ とも刎義なり 設加り

まけむく はつのま 附なり 夕滝ゆう 志けしく 月

ぬこ 月双 日なりき 日交之 急りきて 急くれなり

暁うけて 暁うく時之暁うきて 年乃と 年行絃 なり絃とも

年のつきされハ絃とハ 同なり

公絃刎絃と同年へ

三地具

のり 野之万然よハ草をたてのりともあり 無名之

わやましよそ川の山のしとつふきなり 遊

志らみ 紀のわしきる之 坂東道之 うち 小陸道 ゑこ よろれハのやる道之 わつまみ

四生具

うれし 本書之 かはづ之 上者之 あそわれ 此花 本たきる之 けくわう

の葉ハゆるの 荒絃 志川え 下祢之 こそく 本草の枝の夜 りくくく

ゑこ行ふ 草木盤 生之 ゐのられし 本のしきう一かた之 文字 と云刎の筆く

かむきを 穂包之 うわそし 前押之 ひつら 前田より 生き出

ぬりかへ之 のえいけのるを出え之 志ちむし なへしか

五家具

みうられ 手隠之 ことし ことをきうくる ありまく みとさる

のかり　あをうときさ通へ　みこも　の鷹之　みし　手

さの加り之

うれへきなみ　多能之　まきあの　志きなく　頻能之

遊之　ちおよ点能とも之

志かきひ　志かのさし　かふ能之　い　升　能のう下而へ　さうさ

きえうく　那須之きえ　かろ之　みつそ　きのふ　消乃

いくうくも同し之　うち之

六齋貝

嘯　きわ　かりく　志いれく　志り吟之　いえゆ　いなうさみる　なち

こまれつそ　るとなり　かき　う　せつ　わさわ　もむ之　いてぬち

すまわらめそ

そうなわ

七人貝

人なりく　人数之　まとか　愛之　ふとち　思之

とのり志く　にのり　名之　れさく　優なり　な通めく

やさうく

なわ

志まりく　さ通有之　さり　行おて　とにこ

もとく　むうくさ之　ひわく　白のいて之　むよおりひ　いうて　むまと

むの今通　むまうろ　ふ之　むよの系　ゆうくろ之　へかん　ゆ

んのかるの　むつりひ　むよおい　むつう　んよわ　まろわ

ちあうく

て　神まうわえの名れ　まりそといそ　志てうれ　開よ　まろて　第

いろふ　卑之　むり　梵之　うれ　えきし

ぬかなわ　なれ　とのきし　わとは　こともれ

みまくほしきや

八雑具

やしきから いこし 志きゐ

むかしから [illegible]

かはわらし 黙然 すさあす

そとるよ [illegible] もなく

とにかくもなく [illegible]

こころも なそめ [illegible]

うるはし めもわや 奇妙之 直之

[illegible] さりとて

[illegible] なから 志らぬ [illegible]

とく みく [illegible]

いろはもじ 文字 除式 ひるます やすらか

いそもうし 寂寞 いとはし 寂布 [illegible]

さめく 微之 つめつし [illegible]

うつく 阿へも 志られ [illegible]

こころなくも なれさむ [illegible]

とかく まうれ [illegible]

とちらも 方之 [illegible] 紛鯛之 [illegible]

へち [illegible] いちもく [illegible]

やまひめ やまの神を云 わたつみ 綱ひくわざ 網ひくなり
うなゐこ 童之 くれは しきぬ うつり にほふなる也
たに 膝之 かれ かれいふ文字とおなじことを云文字
また 足之 またく まぐはし ゑらぐ 将之 尚なり
つまこ 妻之 そも 唐も やく 志も 助字也
山 かぬる 谷 かつて はらの字は志てゆく事也 それとは 変るなり
同ひとつなり 名にし はつ ものしらず
いかの字は詞をかえんとする 助字之 みしかなれとも
しかし さても たなしうろなり
うるは 是の 名の 詞は やうくよみ 連なり
わきわふ やうし 志のれは めとやや

まさに國の中は西と東のみなとかわ
くの傳 本ノ むさしなれるかな
山
たかの山 大江山 丹波 嵐山 嵐山 稲荷
山 神あそび杉あり ときは山 をぐら山 大原野 有 神社 松
神山 かつ 是なりけり さくらあり 男山 八幡之 小倉山 大内門方
かさとり山 おぐらの山 志らさぎあり あたご山
たかま山 深草山 伏見山 おとは山 ひえの
ゆふ日山 宇治にあり ひえの山 神まつる うちのま
うねび山 後の是なり まつち山 みかさ山

春日山　大和なり　みかさの山　神まつる　社なり　ぬつく山
あまのかく山　くらはし山　くらはしあり一云主の神まし
さほ山　みむろ山　神なひ山　くらふ山
いもせ山　あり　長谷寺ありとふのみね　ならしの山　衣かさ山
あさひ山　まきあり　伊駒山　たかまとの山　葛城山　大和を
山　ゐなまさる山　ありまの山　出羽なり　まとかの山
鈴鹿山　関あり　とこさうれ山　二村山　花園を
山　花のゝ山　さやの中山　箱根山　かせの山　寝た　大云
志賀山　とつれ山　ならの山
つくは山　ときは山　ところの山　いまた川あり

松坂山　越の山　さえ山　いかほ山　さしもくさ
あさま山　佐山　みをの浦あり　六位菊本切之事　さらしな山　月　めてたし
をはすて山　月　うへの山　わさら山　山の名也
あひ川の山　すゑの松山　思ひ山　おとろ山
ちとせ山　かへる山　雪ふりし　くら山　白山　雪深
しらの白山とも云　越の白根ともいふ　大江山　いなの山　きひの中山
かつ谷河あり　くらふの山　まつの山　いはね山　いも
せ山　山川あり中へ流る川　なかれ出たり　まつ川山　海らし　りすると山
とりはの山　うさの宮の大和之石偈よ　わすられぬまつと云

圓

こゝ思ぬうさ ちかしの浦のつしの
あとひろ

原 付松

さかき松原 しらすの松 ころもの松 かね
しかのまつ なかのゝひろ川 あしわあふ
乃つ綱の松 いくしろの松 肥中の山ひ松 あり
ちらの松原 武隈の松 二本あり 高砂の松
いさうの松 なか

野

紫 さら みか 佐保

志め春日こゝつし 春日乃 三吉うの 久かたの
かの 竹ふれ肥えも寄 ぬれ この池わかさ わかたち
秋わの
ひさし うかひろ いなくさ波 あかいうすみ みなさま

森

いそやの森 人つまの衣 のくれし乃
いそこのいそその このよさのうかの
こりのさそりの 神なしのふまうまれて
うのいく田の志の田の のの
わそてのゆうきの たいその とさ

八の屋なこの波 冊 ろしたの

関

すまの関 海道なり はりまなり 絵森の清見か関 海道之 駿河也

かつらあれいはの 関守なし あふさかのうらまのいそくの

なこその衣手のてまのかみ 海道之

牧

この牧さかひのなら坂のとうさ

りうのあふ坂のこまのもち月の

驛

なかれのひまやちかくみの

瀬

こなせの瀬 大井川にあり なかす 衣乃 吉野の

並えのとの かすま

河

淀河 宇治 細代あり 橋あり 大井河の 後あり 河也 白河 ちらのさに同 名あり

泉河 ゆるうら 音羽 加茂 桂川あり 瀬芹 水

無瀬 玉川 梅津 川 みえ みとあり と

うしのいもせの玉川 七瀬田 みなれ と

みのとさか 竹いまゆるま あまれ 玉

ちくま海 ぬまのむこうの 瀬のつらなり

わくぬかれこゆすそ 大井河のれおほ いすし
うしぬ 淀のれおほ なれさう よこくつく こひせ
ぬなりみ 細代あり 金もこぬよつぬさ
佐ゆあり のりみ ぬてしていけぬ のりゆうらみ川 とこなし ささこ
あゆるぬ河の 引き あや ひよらこせ

池

廣沢乃 浅沢の 名さ ともの なつひのまつの
こころら 猿沢 青衆女のけ地は身を ならくもいるのうとよ ぬまさの
生田ぬの むの ゆうぬのうらやのたこ
乃みぬらのとそらのうれまとみ あらなし

江

うしまに 住の 松あり なまえ 芦あり かり
江あり つまにおそに

沼

わさみの沼 いらかの いらかの上よあり うきをおさす あうよれ
むさし

浦

やまさの浦 やませのせきれ志らすみう
志ほまのうらの ささのあて ひるれてとる 名浦の

海

いくぬ乃いせのよさの天橋立なごれ 以上潟
よさのちくさのもろの わしてうら まつかます 若の 以上潟
以上湖 なり

浦

かけいのうらなにはのうらのすみのいく
ゐのなるかの二見のたかの 和歌のうら あし
さのかうの 吹上のうら みすゞのうふせれ浮
鳴の塩竈の 錦まさき 志のぶの袖の袖ぬ
なかゑのえゑのありそれ 月めて みくまの ゆかま

濱

たかし川の濱ぬりしれちいろのうえれ 苗天くく
ゐかて わかの こゆるぎのぬかたのうらて乃
宮れ白いろのこひの志ゝの吹上の 和歌の浦の吹上
なえ なくさの

崎

いく浦いかこの松まつ山吹のかのえのえこ 松かか

嶋

ゐゑのとちこ浦志のひたきのちくふ 權現まし
まつ ゐぬれしろの八 烟の子 うみ のつ 神まさ

杜小鴨大杜からく笹雛浮おほ浮なれにし秋
杜つくやしやうらく浦嶋か子のすゑの之よさみのたかくさのまれ
まつ浦玉津神まもく嶋濱路ちゑのくかれ
なれ

橋

宇治橋うしひめしひつ河のうきくれ七条橋中濃から
東轅の長柄今八幡橋姫とよく盆川濱名れ濱まていとさら
さいそひのわさむそのせくのさらの長橋とりふ
とゐらのよ川なのわれとつきて濟るなかなかれた
さゆるくされ

郷 付郡

伏見の里梅津の夜まのみの大原れつ
きのえうし乃さくらのなり井山志れの
うきまの十郎の玉河うゑみ乃二むらの
なるこのつるのこかりの玉わの里つさ
らしの郡志のふれ墨くしなの里妙法山のすく
更科河ありあさらの木さのね乃志く夜乃
こゝられなくさのいそそのまつれとかり

井

玉ぬ山乃ね抜子あり紫香をちにありかりふの

神社 付宮

布留の社　三輪の葛城神　ひとことぬし　住
吉の社　もりのつまれし乃宮　こやもの
社　たゝすの宮　塩竈明神　ゑの宮　あさくらの
宮　かつらの宮　つくまの神　条目だとこしろ　鍋をまつる

雑

いはれの池　ことゝの池　ゐせ川の池　あさまの
池　こやの池　なくらの池　あすのかめ　ひろさはの
しなのゝ池　玉江つきの奥　はらの山より　ひろさはの
甲斐の志らね　ひらひとも　さしての磯　志かすの山

よものこゆるきの磯　柿本の磯
万葉集名所
白鳥のさゝなみ山　ゆふつく日　しほの山つま
そまやまのきりむろの山　瀬のみこしさの
山うちかひくさの　長門かたらひ
の山いもの神　まつちやま　ちとひき
ての山　いもの川　きのうへの山　みつかく
みもとけんつけの　まれかそのれん
乃おふの海　松らしま　墨柳のうら
きをとめこら　くれちのうらとゆふえ志

なぬひなかしのかう川まうこせとすきこの
とこのちれせのゆふぬこぬなきこかさ
まみかし乃さきいなかちれちかう川うみ
すゑのうせ乃志まふうゑぬうか川乃石見がた
うつぬのこれかわうられのいえくよ
いさなこの志え川ともせ志かたらし
乃大白山をわいのたかえたもわきのく
ますきめくあさつきこさのなうかぬうま
とぬうこうま川のたゆうさのあとひと
くるは御苑なぬゆくさのこ夜こゆは江

乃こ川せ海と小舟て打渡きれいうこぬうこの こゝも
かひのつまうくすなのこゝうわくれ
かちのうつうこ乃ひこぬかゆふさくる
ぬなきこうくまつちなふせのうせれひと
へこむゑぬつかなうこゝまこちこせこうえせ
きこいりせやくさうこうゑぬのおこみけ
かち志まのとう山志をせ山志ぬこく
ゑぬ山あくしまなをとさゑぬうしまさを
乃もうられわのとませ山いえむうせ
りやのあしかおき(のい)れのうすひのねは

むらゆふさこりかさみのしもよりぬれあふみの
たえ路のあし原のなにをとふけり波
うつせきもしるくれなゐそめにされ
ら山ゆふなみななむすびのおもてしま
しかなみよりかさらくとさくさ

嶺 付嶽

みうしめあと移ろる〇いまはのさる〇
むつきの嵩よしめくらけ志ろなめの
かのさけいこまのなぬる〇

坂

ゆきおひの坂若代の山城乃なさぬさき
めくみるぬやそすありうまぬの
うきぬれちるのもひ

岩

秋月さまさくの岩る堂のまゆきの
むらひのいろのゆきのさらしを
岩代あしきぬめしひ乃

原

山城のつき原まれのぬれむりにきの
ひろおかきものこつの松かみなきの

あきくさのつまをとくらくかちた
よさらんの

野

嵯峨ゆくふかき嵯峨さとしられける
すゝきの乃清沢小野いのかるみあき
らぬえくぬ山ところかさらかてま
さみ住吉ととさしくれわかんれ小い
ませ蒿嵯峨ひくま梓弓す忘路かへ
おさ志めおさ嵯峨わかおし志るさ乃
かすゝ志らのやゆのかいくちれうちなかい

いそくまくくの大おいの嵯さくおくあさく
ちしまみかりしいめらくちのふねな
のむ丈おくさぬまくくつくま

森

いもらいむよいくらぬりかうき田のまそか
すむかねてのたかのなかまくき乳神
なひのいませの山しなのいかくのさ
くさい乃

河　付淀川原

まとひもと妹りよめちてゆふえ河ま

こそめくれわかしれぬさく乃夜のこゑを
うきに家むかしきつうちとせすら
しまのなつこの志ら波いそのさつゝ
うらひさみやのせのともまれと浜
うしのゆふまよわつゝさぬいそて見れ
はぬなつくうくひのはしきかせ
うしさまきなうともふのころぬて
いかむのさこゝひめしらむ見
ようしのあさ川のそ○らしおかしく
まうともいゝそうの河泉あそれいか

さこ乃すこてまこともわたふ乃かなく
のゆそのれかや

池

まめくはらうきぬ乃いろのそわこめく
たてのいろれのみかしのわちの小山
田のう知やまとのうふ乃

江

むかしのありそにはぬ乃ありていかさか
そこらの細さめく入らさらへのうへしら
乃へいのりめとこましのかりなこりわ

ぬなけの滝ゐりかゝの

津 付泊

伊香の江な津なわらぬわら梓弓ひき
乃このとまり

海 付迫門

ちぬの浦こ伊豆乃うしぬなあうし乃
かせのみるめなれおこのおもく乃わら
清乃いなさのなさの志なりとわわ
かりのたかきのうらぬうしきわぬられみ
うさ乃あしれせとさ川まのせと

浦

住のしゆ田乃むられひとさのしかた
むろのさうみかさ乃たやのくらしられ
まつ乃うぬさねのかせれなこ乃いか
りうのなかのうらさきれこわの志きた
乃なかのさうれとりう乃きひれぬぬきく
ひのいそ乃あちのゝぬめのしも乃
ちうえのうつのをしうくのさゝなみの
志かれおゑれむら乃きれ人たのさい
うのとこのしかのうられぬきれまつわ

ふりまれゐのゝぬ忌のかうたを便ひく
ミのなゝれぬきのかちえの

濱

なくさ乃濱きられなかれ、かきぬわ
のぬつかのすゝのしるおらへなさみ
ちのうゆさのさ川のぬうしれいかた
さきのこぬゝ乃くうきれしのうさ
乃志なのふかせのすゝのしれいてさ
のかおさえ江の神のお

湖　付 瀬磯

うしぬ浦おゆしあすゝ多ぬゆゝひくさの
なくさきての磯

渚

おふさちの渚おくちなうとれいおさ
つらかうさぬのひのやまさちのひのふの
いてのまう波まうらさゆかにくのな
うこのおさん太うゝれゐちい志ひめ
めつしこのうちいさむゆさわく

瀬

ミかう瀬としまのうのゆうれ見人わ

としまの蜻蛉のいくそてとゝそめつい
かりのさゝみつくんみつしのいくや
ふるゝ〇のあさつ乃あぬつひめあわは乃
あれのあかしの

橋

まのうれよみのつき橋とゝきれいるて
のさめくあつれしのまのつきいその
つゑんかつるぬつ

望

甚目のさわてすゝよしれつひかしみ乃

きなとのいつゝの衣よとうちいの林衣
みとふのやかなきの里ゆふふ乃

井

きうしぬいそしのそらつきぬまて乃
山のへのゝ

雜

きちわさうちさかちとうきされおか
ゝうしちゝやしちむぬのうきちやま
とらみうしのあひちおくれちる志つ
きの四ぬうきうつゝ祈のすそま乃

田のもに田かねかりそのよくわみやこ
まくいりこの松にいのとまれおゐて
ちのてしまらいそさかゝや志かの
あふらくまいこま山ひらいそのうらかる
の神松よいりのおすいの神のくまえぬ
やゝのこうさ　うすのこゝろくいま
ら山雲をひなれとも人のいひなしから
りかをこいりいえるとかわ月お
ときまものかゆらい花なくそぬきわ
なりしさらぬら月おきとえてめでたく

おうしくそわかなとよくつきなわ

地歌名

祢さめ　志うく　さころも　おちくむ
むゐまき　りわや　あまのはし　そらくゝや
志のひ祢　ゐなきも　地うつゝ　神のうらえ
ちとせ　あかれのうゝらこ　やふよる　きさ
なそしこ　まくらぬ　なち　すゝうし
りそれこの　露の名わ　めくとすゝめ

おふりくへ　おふみさら　さまよりはれかち
めぐへの中ね　さくらけしおさゝの志ね
志ゝ川ねるく　ゑつくらゆう　せかつし
うるのかね　逢の中ね　やつわかをあさく
さう乃中ね　ゑぬをとわ　なゝきかせ姫宮
しられすゑりの露　ゆくゑ志つね志ね
さゑぬかなき世　ゑふのうもめりも　うつや
すつをより　月の出れ　わかや　むうしく
ともすゑつを　衣のゑふさき　契うくの
岑　あさくうしの山　たま中ふ　かりん

志ゝくらろさ　月はたくさむ　ものゝ月　ゑぬ
てしゝさ　岩うつなく　秋の色なし
めかうめ　ひぬこうく　なうとまへ
すゑくこ　わひゑゝや　わめれしゑ
ゑまゝつえ　ゑうの衣　なしさう
あしすゑ道　うひとゝ　いとひ日わね
大津のまれ　とんかのひとけ　老人の
くさゝ　ついなし　ゑ夜の抱經　すいえ鈷
まうゑさ　ゑしめ　志ちのまわ称

和歌色葉集中之一

八雲方舎釈者

万葉集とはしめて古今の百首よりさ

拾まて秘事口伝ともとハ千首えらひ

沙汰しぬるいりハとこれすこしそて後

つきとめらしかつの当時とろく

たかゆるいろハ三百餘首やうむる代

集の雑義抄と此乃奥儀抄なとみえ

多かるをこれを数略しく蒙霧を

いはぬさハ先万葉集古今のよ付併攪

鈔六帖を古今百十三首や

一ゐ郭こ　二うしや

三むゐぬちかひ　四りみりせ

ゐさくなくこ　六二四八

七めまてれ萬よぞさ　八こやび

九うくうくやさ　十なのり

十一なり多ぞ　十二いさくしけ行

十三いそのきる　十四むのれ本

十五ゆまれしきゆ　十六毛まけて

十七うく　十八ゐぬのさ乃さハ

十九めふしれけふれ　廿わりひのかひ

廿一たちぬきり　廿二うりこ

廿三ちとひ　廿四うられぬの

廿五みこりわ　廿六なうさハ

廿七ゐく　廿八山のめ

廿九和のそかり　卅くさまく

卅一いめうり　卅二おとめ子みつゝさ

卅三こよくよ　卅四うなぎ

卅五ぬりれお　卅六山ちり

卅七わうひく　卅八うりゐへよ

卅九 くひなのこゑ
四十 うけらか花
四十一 わすれ草
四十二 てまれ笄
四十三 ささのまろちの
四十四 よかくれ玉
四十五 夏そひく
四十六 やそうち
四十七 むくらくさ
四十八 よこや乃山
四十九 みわさけころ
五十 いのてうし
五十一 えんれうの
五十二 ほはらの
五十三 あさてうふすま
五十四 あちしらせ夜
五十五 わさのめはき
五十六 みちのまむらさき
五十七 うつせゝ
五十八 みさくそめく

五十九 あらし山
六十 おほなむち
六十一 これまの山
六十二 ことゞめのまくらひ
六十三 ぬきとりつゝ
六十四 あらくま
六十五 はちすのつとめ
六十六 うら紅木
六十七 いつてか
六十八 やそおね
六十九 おかいおそでか
七十 かすえ
七十一 そわむけろ
七十二 とのさく細布
七十三 妙かのきぬ
七十四 やうらめき
七十五 うしくさ
七十六 小車のわき
七十七 ゆかく
七十八 せかつむ

七十九 いとつくさ
八十 さゝくさ
八十一 ゑのきふく枋
八十二 ゑのみゝ
八十三 酒やしろ
八十四 ゐぬらうゝお
八十五 ぬうさうの森
八十六 ゆつのつま櫛
八十七 ちうのしかま
八十八 やくそう
八十九 おつめくさ
九十 [illegible]文石
九十一 石楠草よ
九十二 うそいろ
九十三 ゑめゝう
九十四 やうゝさ羽
九十五 みゝぬきの冬
九十六 くゝぬけ
九十七 つくめゝ
九十八 ゑぬまゝ川

九十九 ゐぬのむのうら
百 まつしろ
百一 うつのやまゆふ
百二 いかゝのあさし
百三 袖のすゝ
百四 こまつ川
百五 ひもとくあゆ
百六 夜ゝ人
百七 そゝうくぬ
百八 ひつしのあゆゝ
百九 ひまゆくこま
百十 月のねつゝ
百十一 と紙つのひま
百十二 うるもく
百十三 ありそのうら

一 男にくくめらるゝもめぬさりうひの
前にゆきてよなかまふかくわれ
たのみしの情ごのさりひよ誓紙の血判を
云ふは君のうへに見なれおつれん
いたらくくめらるゝのうへてよめる集ふる
誓紙と云ふもと水の字を氷にて人
うれぬうひとあてまあてよくきりかりか夜
あとも元とへいわれらちのひろ味のあ
われ集ぬめつかしの涙にてぬるとききて
うそうへとかふも叶てきこゆと前世

おかしくて出るなり
二 釣客りしゆうしゆくりそえく
うゑしにさりは家とひめ屋も
釣庖といつとめての庖なりしとは
蛙なりしひやといへるわまさ武家式玄
田舎は奥とよろしてするま人河になく
よすと云地とゐてまりてはとおきて
手守はさし枕なととわときとれそ
わたしわか什てうとのあつまると見や
るれとの入のまとは奥ハおしろきてう

すれいちらく屋をつくるおとしひろある
人をはなしてゐるなとをとらせ又さひのの
とうらすらかしりしてゆきとりしひらけ
それいこのやと飼屋といふなわかぬとく
いつらけなといふりのをひきされくるふ
なるくし但式視は云縦る国はた河岸の
トよ居屋のわくとりやとゆふとそ
三 東湖のうちの果なりひくら芳
くらわりもわんとそおりふ
此年やうくはかすく人わか中に式人云

むかし此国に男女のかたらひあるによりて
は麻苧といふものを筥にして手なれ
とりて二人これをさゝけする男の名とかきて
鹿嶋明神（かしまのみやうじん）のれおましてのとこにて
筥をとりかへして名をかくしてすゑを
神宮にむすひけるもありつき中たんか
きしくはひとつれはよろつさいはひ筥の
神に入はむすとひつれろくさりふ
おとこの名かれはやすくしけおもひのまゝに
うちとけつゝむすひけつるとする筥な

新羊なれはこそいふてとはかるつきく
いふこともなし文おもひふもうてまていふの
あまいくつてよめるなれ文かこうてくれ
たなうふむなれわふてにうこしく玄袍
おわこきまて鉢をもつなりふなわされ
いるの筥のはなされはさるつわ乃とされ
もあわそうしとよめるなりわさことく折（せい）云
玄（えん）なわとつへとしるすかうれとつう年ん
後撰云
あらしぬさおもひとそこくつのの

きよくわのちりひかるらん

豊受之宮

山田さへそはへともちる花の

かぜハ風よおかせさるらん

けさハはるかにむかしなり

口 神風やいせの浜荻打ふせて

旅寝やすらん荒き浜辺に

神風ハよくあとわるひふみ式云抄裳濯

河よ神風といふ淵わ大神宮の御前

くるわ給へるよりたわ日本記云垂仁天

皇廿五年三月朔日天照大神倭姫まかせ

給ひし時倭姫命とハそのおほむかく

此神風伊勢国ハ是常世浪乃重浪帰

するくにの旁国伊勢ありかくにと

おほせ給ふ五十鈴河の上奥ハこれをすへてと

いふ即天照大神としめてあまくだり

給へるところなりといふ是より云始

是磯宮ハ是此のさかえといふみなとして

濱荻とハ葦のなかわしとて濱の

名也わり

ぬ　さゝ浪やしかの山風海かけく
つかすかあまの袖くるゝ也
日本紀云天智天皇粟津の宮に御座時
仏のち建立の御志ありて勝地をもとめ
給ふに六年乃二月三日御夢に沙門
来云坤乃山に霊崛あり早く行給ふ
へしとありて帝おどろきて彼山
に行給ふに一すちの光たちてその谷
鈴に人をつかはしてたつねさせ給へは
かの来云光にあわてゝ右に小山清并

に小谿あり又優婆塞ありて經を念誦
しその所にいたりて見に撰行を
ろむに帝諱者と云たへし帝その
所に行幸し給ふに優婆塞いそ
ぎむかへてまつりて山乃名をとふ
答て云古仙霊崛伏蔵乃佛の實の
長郎山といひていにしへをしるに
伽藍をたてゝ給ふ今乃崇福寺是也
王宮を去ことありてふはいをりて灯
樓乃下にうつし給ふに是後數

佐下椛幹臣奈良麿天平勝宝八年二月
らしめしけてるよ法舎といふおこなひして
それより今まいるまでも椛氏乃常華
乃説て含行せ年くりくは志賀寺縁
起よみえてわきされは志つとしみさぬ
といふ半せれらわなわせ気まく長
ゐ山さうわとうあつさは大津とまさ
なとの國ともよめりをはのちらを
いつくもたくつきりや
六 なつさりとさぬさしとよまむ 郭公

二四八とうてとちくわかなしけ
きれさとは来鳴かむとよまむと
は聰青なむ二四八とは初音なむ八のは
は初なむ初声よはめつしきとなり之
とちくかとは百千なとうをわ或合
時鳥はぬあわかなしけはとちくわがしと
いつふ来の人の云よ
二 とちくわいかなくとも 郭云
二四八ともよめつしきされ
いふよ鳴とは佐界の声く百千の之絵

たぬりあはなくとも初声のことくめ
つらしとよめる文かとくほいふとか
てふやことを諸ともにいへん新古今
とよめるよくやくいつも或人云ふの初声
と万葉集の家くいひ年と侍
るわざせる年もなりき古今なりわ
らの二首ともに一段の難あると或申
云初の二句とうそとちうつりかけし
りき後の二句ともよめつらしきされ
と文字をうましてかはさうしき年

なわざくは初春の義れ叶はさぬし故
くらく気よむしのうくは句とさくめ
き詞とその文字とあまりとを
多くはともよめる古今よ脩きて集
乃人もよめるなるべし
七 春されば草の草萌えし去
象はくそらんにみりわくわと
春されはうきされはしありあつく或
説云草よ萌へし末なき草に吹くかなで萌る
しの草の末をえねどいふなかむり

たとひ此世よ女れおもひぬく
くるしひつけて主家をとらす女なり
のかくるなよろこびとさして家来の
もよ並乃すちよおかるか里よ
あるなわざとしぬかとこ渡ようす
とるめつめくさうしと契りてゆき
さかぬを渡世よおもひなりて京
よつるふまつわるくろうところところ
かとよいふ渡世くしてゆきとその
年乃暮よ渡く成て物よゆきてさ

しかし其をよろしく家を保つきさ
てこゝえもとむめのもとなるあてむなし
くるつゆよるるわさとゝ
八　梅花の其よろこひこゝやひとから
むしまれとまれのふなさけと
こゝやひとつい媚をめつしてかか伊勢物語
よいいかし人の人いうおもしろやむかしとな
むかしそおもふ世継(よつぎ)も女れぬち
れなりとゝそするもろくこゝろいひと
うつしくらいなさけとあるめ一ってなん

これわされハ親輔がもとにも
ことひとつとてもあまた樟巖の
かうき山つてよまふ物かし
此前出す媚るめらむなかゞ文武経にこえ
いかゝ思ひといふかゞ文集あるハ閑乃字を
こくひかなるとよめり閑露寒なしにこ
もやさしく媚るめらむりてつ源氏物語
まも此絹徒かくとハ俗にいわるぬゆめ
よなかゝ洒ようくつゝなるか
九 むかしよりいひしへてやさしまささくも

よゝろぬ宗ゝ名かうしにおかよなか
むかし天照大神吉乃宗ゝよ移まし
くし附思兼神ハかゝとなして天香
久山乃榊を生なからにとつてく山の
えまり乃木を神かうしのしてこまらなの
かりのとやさくしおをせし峯なる件
乃まて今の世まハ中臣部氏乃前数岩乃
まうて亀乃甲をやさくうなかふなか
石家まハ亀甲乃うらこて今よりあるさう
此流なり むかし乃思兼神ハ今乃中臣部

氏乃寺社なとのむさしやうに麻乃女
しておほよそとするやうなるまさきて
といまさしていつくやまとの歌
詠乃方
うし山のかくしろしけて
くちぬく麻の書らひなみそ
うし山とよりうりしき山なかりさぬかれ
あなたのいなうめしよくい書とうかんとよ
めうたかつまとい書あわか
十 すきりの志さ川内りのかなのかわせ

かげつけてしもありぬあへしも
志き川乃うちいる乃名なかとすきうるよ
あれなかのわれとい神名藻なりうなれに
なくしといたむしとてなのかれとさい
十一 志らのあまのいそよりありとも云たれ
名いつけてしをいられあひなきさ
忠実乃海ハ筑紫よりの熱海郡と
うきわなつけりしに名告藻ともうつ
十二 家宿のいさしく行つ風乃
なとのさやうなとうの中へ入れ

いさしけ行といつきなかりハいさりま
よくなれむともそう
十三いろのうへみろの早苗とひて上毛
つれさひえへよめちつとそん
むくすまいよりすともといふく黍と
い熟なかり不黍くい不熟乃附たれハそ
乃とかうとつくろ年すい大和国石上と
いふところよ布留明神とつ小神とん
すうなりき布留社乃正体い劔なりり
じうし神代よ神钢三柄わかわ弟一钢ハ内
裏よわりく今乃宝钢ざなかり一柄ハ尾
張乃くにあつ田の社の宮よ草薙钢ざん
一柄ハ大和国添上郡布留社とこある
といふとい钢布留河のよみかすれ
て名とくぬくくなられらふあ宮
よき布留河よ在の布とあつひたるよ
その布よさしまいて件乃钢のゆう
こわられい布よそしまうとてろぬ録
なりいまの布留乃大明神ざなかり
これハ破上一布留とそよみなりし

宗よく
極しかきのつてこれをしめすか
かゝる事ともこゝゆゑにかも
覚ゆるところいかゞかる事は余所
かれは通してよめるや覚よつきく
猿乃人かうこれよりかの乃中る
世の中のまのところかくれはめつき
其よりせく云うかゝし初乃言よ
りかてとやんとやうゝまかてはさ
らむとつるなり

十四 わきもこかぬ掛しもかめ埋木の
下よそゆくかなしきて
むもれ木とはきめる木の出る谷
なよかしめると云かゝ下よ行ふる
しつゝめかむよりてふめり
十五 あへの嶋かすの何石より波の
まなこのはやまかゝ嶋とも
あへの嶋つくしまの鵜の何石とは真は
の岩しや大和嶋を○とは月廿の名所か
十六 其まけて物おもしとはれ小我を文て

とふみかなしく鳴ぬるしにくけむ
まちけてとハいふさしかいふんなかハ露
とうきくまけてくよあかぬるさと
いぬれりぬめうわつふなわ
ませうしまて照(これ)ぬ見ひつふ峰わ
むかれしもむとわなりんく
うしとハのとうにと云心なわ山ひん
つまてつふるハまうしいてれの日も
まふかとへあうかなわ東行西行雲
眺々二月三月々逢々と云鶴と小歸

參詣乃人の禄しうらすとしきゆ
るとゐかゆめよくき夜よゆきかふさま
よゆきさ雲ゑろくさこさやよ白
ちくとこそ禄すれと天神乃れかなせう
まとろなりへいおそしと云心めてあん
六ハ山里ハゐのまみさかもふしつきれ
たし稲川とてろふもくし川
ゐのさしとハ田の際なわさめとハちハ
きさハ草なわつくしよ雑草とハさわ
とりふかりとし稲とハ逢稲と云かわ

此方上方祭になしとぞ
十九 ねざめゆきつまゆきとそいりあゐ
りのつゝふな象すれとわり
つまゆきとおもふはゆきとなれは藻も
開東鮎とうきる藻に鮎のおつまり
あゆとつられとこそいふなれ
うろよとろおゆ乃小鮎なりすれと
ねといつかすりをいふなり
二十 侍従乃あまの鄭なるかなはるてふ
おりひのめのめく桜ひして

鉤なゆふなれ鉤ろ大なりつりて海よ
入とれるとつふかりありひのういて
口のうちくるよ付ぬるにりてるいわ
りひといへるなりてふといとぞいふ
とつふとえんなり
廿一 初瀬河白ゆふ花れよおちぬる河
河せきりとこゑにうもれと
くる河せ川は大和のくる河せ河なりきて
ゆふ花とは白木綿とよふりその花て
ゆふくれのつきよおちぬる川なり

多きつくしてきこゆなり
其二 かつはら郷しかさちよりこち河を
からひよかつせいつくませまし と
桂江は津国岩中河のかつはなりつらを
これ末摂しらきつ未乃古岸なり最長
ともうきなり
其三 あらるの鴨の住池乃しきひおく
ゆりしき宗をくふきつくれ
忘ぬひとは池のしかゆよ樋をとりて
ゆあとさをむくなりさされはおもひかりくさ

もなきしにはせてよめるなり
其四 からくれぬの下よりふれはあさましと
へぬらくわつらはしかへきりのと
かくれねとうくつよ堤なりし乃池のおもひ
ゆるの沼をいふ文池乃異名なりとも
いふなり
其五 おく山の岩かきぬまされとうかよ
こひやもりんあらうしとぬく
岩垣いは石播なりみえかくはうかくれ
なりみる笔くりきるなきしは出く

廿六 さぬきくにむのとかうみつくに
かしのうねのなかに沢乃こゝや
さぬきくにかめなかむのとゆる
に合とうみとにふかしてなかさん
にかし乃山のこ〇よみめしけなれて
とやのすゞ沢なかなるさるの絶より
なかさらくいのちとうさうよるみる
うしとよめうことは此山や武人云との
とのぶうのさともよするぬれはうるい
うらしうさむともいふ

廿七 宗くめ山田乃そふよるくつむく
雪きれるよりすそめくしけ
武蔵云らふとは沢なかる高なれはなをは
してよめるくいへともきこえもとおり
えよそふたらのわさえとうつかゝ
そふく川なんといふうつるゝやうし作武
八そふとつふかなしさいとこそあれさ
とうかなくとは芹乃矢名なかる武蔵
葉乃おさはくまうしきともとらい
えうたしとよて雪きのみとは雪清乃

ゑなり
此あさか山かけさへみゆる山乃井の
あさくも人とおもふものかハ
葛城王陸奥よりつかはされける時国の祗
承乃つかさ饗応おこたりのありとてうちよれ
むしけてころ〳〵かはねとうきされ
い古今仮名序にもあさか山のことは
うねめのたはふれよりよみてかへりきかへりを
られと大和物語の姫と内舎人へぬすまれ
て安積郡浅香山にいりて家居して

ゐかてすゑて里に出つゝものとり
めくくはせしかくに出て二三日さ
こさりけれハまちわひて山の井に
かけをうつれハあらぬすかたなる
いとおそろしきなりさまをはつかしと木
にかきつけていほに入て死にけり
おとこものもとめもしてかへり山の
井なりける哥をとりて見てそひふして死
よにふる世のふることになんありける
とかく此物語乃ひらきしなるへし

六九 あまさかるゑむかしいぬよせすまひつて
みやこのひかりわすれはてまゐらせ
是は山上憶良か子なりし天雛しらく
あまさかるしよめるゑむかしいなかや
夷しうさそゑむかしよめるなひ也とい
四方よめるを南蛮西戎東夷北狄といへ
鏑のちなれは西乃ゑむなるへしせい
五年なかす十五のは信濃なかのらやこの
てかはといふ中へゆくしまさる鑓なかり
みやこのまへ鐲把といふ

七十 みやこのうちやこゝにおきてうきよまつりかはしれん
みやひゆきをいりしきまゐらせ
みやこは月もかをとふようてハ久堅とく
いふみやこをいふてまへるなかみやこし
ともやく文帝都なれは天国といふよ
ひられてよめりしや良卦記よい帝宅とく
くなかりやこくよめるゆへなかりけ都
とはひかたみなかり賤なくいむかひよ
生きくいつとゑらむとひてまいりまする
なかり

其一　萬木枝かためくはへいろそめてく
いませいくさもおさまりかはせましく
かめくつくろのとしは昔神武天皇卒
酉朔よ令といましめくのなまゐく我
あまらしあらくは六年よなかわれは
まさに山林をひらきひま宮をおさ
めつらてつくさく遠ほよのそこてむと
しつむ丁觀夫畝傍山押橿原之地益
國乃墻迹也敖とはらるへし此月よたれ
うきふかおかせく仕婦帝宅故よおたと

うるわ績まうていつくうはしめうしやらく
ましていろのまゑ柱ふとくしらまの
りよ髪わ振つわ极宮乃柱のうすと
そうかくりしくい日本記よこえるゆかほせ
いは彩なか刀自なかとそかいうしと見ゆ
おめかりかせしくいせけりかせしとい
なかめとりしくい通言なれいらく
其二　とよあ子ら神つる山のそうさ乃
ひさしう世るかいそひ初くらき
是い人丸乃歌なか岩家神まうの城を

磯城にうつし給ふこれを瑞籬宮と云
かしこハ日本紀にミえたるつくしの
おうの伎地なりされバそのしるせしもく
いむしろいいんとてまつりきこくハ
よめりなかりなりすとも名つしき時ん
むろよわともおかしなる詞や
かつハよそもしきりしとるつきの
れらみこうんと○くまつせハ
さい孝霊天皇朝彼家よゆさし給
ひし時大后嫁法云乃ぬてまつれ

うくかり宗神天皇の瑞籬宮よ信給
ひしよりりて是名とゆうくさとい云
かめるてまつる初之かつハ乃らといふるれ
ふりこくしもしうさしといひ撃とい
なり又かの式人云うつくさい神乃社の
垣とつふかの神いふるさめのよめまほい
宮さしき世うわくいふなりつされて
あるくれつる山とハふ大和国よある
わなし山と同ふかり是名つしき世とい
つきるかなるしし女子とい神典

神女は辟地なれは神なる山といへりかゝる
なりは未通女ともかく乙女子ともよめり
とされと女を用ゐしはなり上乃帖の奥
名の歌にあり
とし先ころとくとめさしすもらむの
乙女子さひとも乃うかむを
天武天皇以大和國高市郡飛鳥清見原
為宮故也これは清見原天皇吉野河に
幸して琴をひき給ひしに神女
あまくたりて舞ひける曲なりとか見えた

おほとのはらめくいまれ
おこなひしをなりしむかしは神なり
さしすいとさめなりとしつる也或人云
りしむは日本紀よむりとやいふともみえ
ゑめわとめさひとしいし女おもひす
とりふなわいへり
所ミ　とよそひのうつくしき乃山よいえとて
うられよそらしをてとらまさね
とよかさは日本紀とよあり天のつかの（とよのあかりのえんくわい）
昔といひつたわる也豊後國とりふすや

なりしとはそうしむかしなりしてまさね
はるまさしとなり
吹やうれしや沖ゆく舟をとくへきとくや
ひきとゞめまほしきん松浦さよひめ
うたひとは海なり松浦さよ姫と大伴
狭手彦なりし史帝のつかひとして
みまなにすくはんとてゆく時その
わかれをおしみて此山にのぼりて
ふねは離りところふれしまぬ
へだたりて領巾をふりてまねきける

ところの洞をなづけて此山を
領巾麾嶺と云此山肥前国の松浦
と後よ人よめるなりこの歌は進退和歌と
いふなり

とかくひとつ国にまかりぬさよ姫の
ひきとゞめてふかき思ひまつら山
此山をまつら山といふ又まつらかたと云
なり松浦明神とて今におはしますその
まつらさよ姫のなれるをひめ神へ
るなり

亦又ぬれかゝれハこそと宥めて
家とへいかれその人ぬれハか
女こゝろうつくしく心傳(こゝろばせ)ありてころ
大伴(おほとも)の黒主(くろぬし)うちよとなかよ何ころ
女らの花ことをかひけておやしさ
姫のさ海とつらて秋ゆきく門とて
きく東隣の女の児とわよまいらか
なといひたるとおもつくとも志て
児りかそうせてむなしくへつるか
かれハおしくひてめぬことをいちらう

きく女乃ゆきつゝ笑なかゝぬれハおくれ
好ちくうをわ婦(ふうふ)忽くいふむかしわおそと
いきうしなしくいふんなり色らのそれ
きけと家とくめぬきくなきて色
このなわてよめるなか内中人いきう
なき半をおそといふなか又おゆきの
りのいそうしとをそらめやうつふおか
されハそうしも色のこよめるなかちも
きくぬなしこ云詞なか
亦云 山鳥のおろのたかおよしけ

こなしの人こゝろそかしさおもりがすゝめ
むかし陸奥の山鳥をとらへてその
うらみをはらさんといつかれども
つくなきうたうむわが女なと〻かれ
てなかぬすんくるしとりけて世俗に
とりたれは竈に続とうけぬかなよ
しけきそてなきさりされはなとこて
こそなきゆゑよめるなり式部説に山
鳥は彼よなれは妻鳥といへ山の尾をへだてゝ
て別々よるいねるつきよなかれて丈

鳥の毛ゐながくてあるは女鳥の尾に
のこしてあるなりは山彦に山鳥なく
といふ事は是なり古歌に
引ゐるいうくもいうつゝて山鳥の
かけうみて錦はなかれたら
此うへ家持とく続にあるむよれ
てらへ九首に
あしひきの山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜をひとりかもねん
山鳥のおハながく紀物してあるゆへなし

しかるにわかれハいつくよりか山鳥の
おのおのおもひ雄なりとそこの
志るしおくわかれ式説に云山鳥ハ
おとこへなくしつふしくハ山乃尾と
へゐくつる半にハおもひ一夜にゐれ
ともおもひ尾とへして中にへだて
ゐるかなの中かくれてとのつから
よおもくなるひ称ゐかこいつの山鳥
といふとてわしひさく伊せそうの
山とあしむこういつよ日乃證あの一まい

三方御説思ひよ山とところあのいハ大雪さ
よりひてあとつしかるひ侍るとて
おしむここの山説もあまた白樫(しらかし)の
枝もぬりくよ雪のふれゐハ
と詠しをれハ思ひはのゆくよ山とあめ
さしつよかるぬりくいもぬりむかわ二字ハ
椎古(すいこ)天皇山に入りわし後のまれ思よ
ふねとよくぬてかくむこ後へか
ゆるもかし山といれしいひさくつ　日本
記よふえよりこつはいきましまし一角仙人

紀ぬいよ一乃角ありける麻足なりけり道力
いありけれとも夜かゝりて山乃道よく
つかるにしよまて追とるをとな
つかりしと紀こしよりける追うけいかり
空よいむりし玄虵さけられて目井去泥は
いまくありてくまろそありし時人皆
山よありけるとりかやさくらわらの
ありけれは日井やと山ありくいひてやま
とりふかか山へおりかのありするを足
と紀くよ似かれはありしひさえもいか

この四月の中よ中仁乃花さと風なりけり
花も ありしひくいろるこのこおちさくれは
ひろつまゆくまて家うしぬへし
ありひくとれ赤羅引色好咲とい花か
乳の罪とうくなかゝ花もぬとめさくるめる
色々ぬへとしいよなかわられもとくぬるめ
とつふかゝ花しい織女乃余なかゝ
うくものとのあかいわきそこの下ひく
釣夕きとみとまひいとしし
喜撰式云 秋はあくむ紫はむしくむ花は

めかむといふは但広集にむかしむかしの夜
ともしむかしの歌ともよめり歌も皆
こもよろされいよりして云かなり
天暦（てんりやく）乃御会にも少將文殿　清慎公　判
者にてむかしの歌といふことは僻事（ひがこと）
なかの歌といふむかしそといへしむ
は判乃抱名なりとてもけふ御御
表様の式乃ましきや
歌ハうつるてよ色のすかくさまかしく
ゆりんといふや云ととにとて

うつりかへる色まてはとふころなり
浮抱とはいうしき歯をまかりしをたもて
まかりしと咲ふなり